

佐賀新聞 2016(平成28年)12月9日付

江戸時代に佐賀で編まれた『葉隠』。今年はその成立から300年を迎える。一般的には武士道の書として広く知られるが、その内容は藩主の事績から武士の嗜みに至るまで、多岐にわたる。葉隠は、江戸時代中頃、戦のなまなまった泰平の世に成立した。では、一体なぜ平和な世の中に『武士道の書』として名高い葉隠が編まれたのであろうか。そこには、口述者山本常朝の《憂》があった。

葉隠と忠臣蔵—天下泰平の武士道—

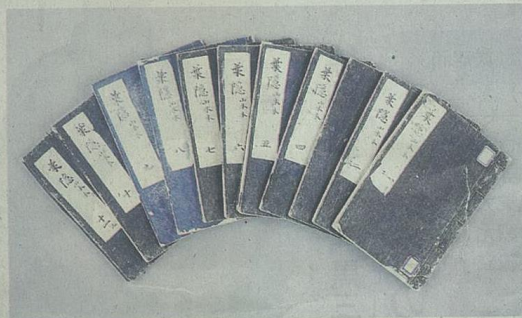
寄稿 県立佐賀城本丸歴史館学芸員



藤井 祐介

両者を結ぶ「忠」の見せ方

には乱世における龍造寺家から鍋島家への御家交代や、藩祖鍋島直茂・初代勝茂の事績を指す。二代藩主光茂の時代、文治政治が展開される中で、藩士たちの間には「陣立て(戦)などこれなく候て仕合せ」という雰囲気の流れ、今の御家がなぜあるのかという「国学」が忘れ去られようとしていた。こうした状況に危機感を抱いた常朝は、「国学」を念頭に、御家へ「奉公」していく「鍋島侍」としてのあるべき姿を葉隠に説いた



藩庫に納められていた葉隠写本(公益財団法人鍋島報效会蔵)

常朝が鍋島家への奉公のあり方を説いたのは、泰平の世だからこそでもあった。元來戦闘者であった武士が、戦がなくなり、戦功をあげるというかたちで主君への忠義を示すことができなくなると、その代わり、ひたすら御家へ奉公することで主君への忠義をみせることを説いたのであった。

葉隠成立の15年前、元禄14(1701)年3月14日、江戸城松の廊下では、浅野内匠頭が吉良上野介へ刃傷に及ぶ事件が起こった。内匠頭は即日切腹、赤穂浅野家は改易となった。翌15年12月14日、浅野家旧臣の大石内蔵助ほか47人が吉良邸へ討ち入り、亡き主君の仇を討った。この一連の出来事を「赤穂事件」と称している。大石ら46人は、幕府裁定により「切腹」となった。

本来ならば、徒党を組んでの実力行使は幕府の禁止するところであり、斬罪相当であった。しかし、主君への忠義を尽くした待として、切腹という武士の最期が許された。赤穂浪士は、泰平の世において、「討入江」という実力行使を以って主君への忠義をみせたのであった。葉隠と忠臣蔵。この両者に見出せる共通点の一つは、戦を生業としていた武士が、その生き方の転換を迫られた泰平の世において、いかに主君への忠義をみせるか、ということにあった。泰平の世における武士道は、その「忠」の見せ方にこだわったものであった。

紙面編集・豊福絵里奈